

氏名(国籍)	ツィガルニツカヤ レナ (イスラエル)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4878号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Conceptualizing Beliefs in Language Learning: On Narrow- and Broad-scope Beliefs in Japanese Language Learning (ビリーフの概念化-日本語学習におけるスコープの狭いビリーフとスコープの広いビリーフについて-)		
主査	筑波大学教授	Ph.D. (日本語学)	カイザー シュテファン
副査	筑波大学教授	Ph.D. (言語学)	岡崎 敏雄
副査	筑波大学准教授	博士(人文科学)	一二三 朋子
副査	筑波大学講師	博士(学術)	澤田 浩子
副査	筑波大学講師	博士(言語学)	小野 正樹

論文の内容の要旨

本論文は、応用言語学における第2言語習得の重要な研究分野であるビリーフ研究を対象とする。BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory の略語) という研究道具の導入(1980年代後半ごろ)以来、ビリーフ研究がさまざまな言語学習コンテキストで盛んになされている。しかし、その研究対象である「ビリーフ」が具体的に「何に対するビリーフであるか、どのようなビリーフであるか」という点についての考察がほとんどなされていない。そこで本論文では、日本語学習という1つの外国語学習コンテキストに焦点を当て、ビリーフについて考察を行う。具体的には、BALLIを構成する項目を分析・整理し、BALLIを軸とする研究とそれ以外の研究を検討する。その上で、ビリーフの範疇化を試み、その範疇化をいかにして実証的な研究に応用できるかについて3つの調査研究を通して考察する。

本論文は5章からなる。

第1章「BALLIの分析」では、BALLIの導入以降、さまざまな外国語学習のコンテキストで行われてきたビリーフ研究を概観し、それらの研究の目的をまとめている。その目的とは、以下のとおりである。

- 1 学習者と教師のビリーフを明らかにすること
- 2 ビリーフと学習者要因の関連性を調べること
- 3 ビリーフ構造を調べること

次に、BALLIを構成する33項目を分析し、それらが異なるタイプ(本研究ではスコープと呼ぶ)の項目であるということを主張する。スコープの異なるビリーフをそれぞれ「GEN (GENERAL) ビリーフ」、「BS (BROAD-SCOPE) ビリーフ」、「NS (NARROW-SCOPE) ビリーフ」と名づける。BALLI項目の分析の結果、BALLIは、22のGENビリーフ、10のBSビリーフ、1つのNSビリーフから構成されていることを示している。この結果から、BALLIでは主としてGENビリーフとBSビリーフが分析されていることが明らかになった。さらに、日本語学習(JFLおよびJSL)という外国語学習のコンテキストにおいて、BALLIに基づいた研究

を考察し、<BALLIがどういう形で採用されてきたか、また、どのようなビリーフが研究対象となってきたかを明らかにしている。

第2章「日本語学習におけるビリーフ研究」では、日本語学習というコンテクストを取り上げ、そこでのビリーフ研究に使われた研究道具を考察の対象とする。使用研究道具によって、それらの研究をまず次のように範疇化する。BALLIをそのまま使った研究を「BALLI-based」、BALLIに変更を加えたものを「BALLI-inspired」、BALLIを使わず類似した研究道具を使った研究を「Other」と名づける。次に、第1章で提唱したビリーフの範疇化を用い、それぞれの先行研究で対象とされているビリーフを考察する。

項目分析と考察の結果、次のことが明らかにされる。

- 1 前述のように、「BALLI-based」の研究はBALLIをそのまま用いているため、主にGENビリーフとBSビリーフを分析対象としている。
- 2 「BALLI-inspired」の研究は追加項目がほとんどGENビリーフとBSビリーフであることから、これらのビリーフを研究対象としている。
- 3 「BALLI-based」・「BALLI-inspired」の研究ではスコープの異なるビリーフが研究対象として混在している。
- 4 「Other」研究はほとんどNSビリーフを調べている。

以上の考察にもとづいて、(1)「BALLI-based」・「BALLI-inspired」の研究ではGENビリーフとBSビリーフが混在した状態で研究対象となっているのに対し、「Other」研究ではNSビリーフが調べられていること、(2)「BALLI-based」・「BALLI-inspired」の研究者が項目を変更したり、新しい項目を加えたり、BALLIをいろいろな言語に訳した際に生じる項目内容の意味の変化を考慮しなかったりしているため、「BALLI-inspired」研究の比較に基づいている研究と異なる言語でのBALLIを使った研究において、研究の一貫性が失われているという結論を導き出している。

最後に、ビリーフの範疇化をどのように実証的な研究に応用すればよいかということ明らかにするために、ビリーフ研究における3つの目的(前述第1章の1-3)とMori(1999a)の研究成果に基づいて仮説を立て、次章以下で実証的な研究を通してこれらの仮説を検証する。

第3章は、仮説(1)「BS・NSビリーフは独立的に存在し、異なるビリーフはBS・NSビリーフとの関連性において異なる」の検証により、ビリーフ構造を調べることを目的とする。具体的には、1、「日本語学習の様々な要素の難しさのビリーフ」と「日本語学習全体の難しさのビリーフ」の関係および「日本語学習の様々な要素の面白さのビリーフ」と「日本語学習全体の面白さのビリーフ」の関係を検証し、2、難しさのビリーフを面白さのビリーフと比較する。

難しさのビリーフの場合、NSビリーフは協力者8人全員が持っていたのに対し、BSビリーフは1名しか持っていなかった。一方、面白さのビリーフの場合は、6名の協力者はNS・BSビリーフの両方を持っていた。このことから、難しさのビリーフの場合も、面白さのビリーフの場合も、NS・BSビリーフが独立的に存在することが確認されたことになる。また、難しさ・面白さの両ビリーフがNS・BSビリーフの関連性で異なることから、仮説(1)を裏付ける結果が得られたといえる。

第4章では、仮説(2)「学習者と日本語教師のビリーフはNSビリーフのレベルで異なる」をたて、日本語学習者と日本語教師のNSビリーフを比較し、ビリーフ間の有意差の有無を調べる。NSビリーフとして特に日本語オノマトベに対するビリーフを分析対象とし、120名の学習者と140名の日本語教師のデータを収集、分析した。学習者を「中国人学習者」、「韓国学習者」、「その他の学習者」に分け、記述統計によりビリーフの平均値を算出し、またANOVAにより有意差の検定を行った。その結果、対象の12のビリーフのうち、8つのビリーフにおいて、日本語教師と学習者の間に有意差が確認され、したがって、仮説(2)が検証されたといえる。また、学習者間の1つのビリーフの場合、有意差が確認されたことから、「出身地」

の要因があるビリーフに影響を及ぼす可能性も示されたと考えられる。

第5章では、仮説(3)「NS・BS ビリーフは学習者要因との関連性で異なる」を検証する。まず、ビリーフ研究におけるビリーフと学習者要因の関連性を調べた研究を外観する。本論文で考察対象としている34の研究のうち、25の研究がビリーフと学習者要因の関連性を調べているにもかかわらず、どのような学習者要因がビリーフに関連するかについては考察がなされていない。そこで、今後の研究の基礎データの構築を目指し、それぞれの先行研究が対象とした学習者要因ごとに研究をまとめることになった。

仮説(3)を検証するための調査では、102名の学習者のデータをもとに、BS ビリーフとして特に日本語全体の難しさに対するビリーフ、またNS ビリーフとして特に日本語オノマトベの難しさに対するビリーフを、学習者要因の性別、年齢、専攻(理系・文系)、漢字圏・非漢字圏、日本語学習期間、在日期间、日本人の友人の有無、自己評価による日本語レベル、自己評価によるオノマトベ能力、オノマトベ能力テストとの関連性を調べている。まず、ANOVAによる検定をおこない、性別、年齢、専攻、漢字圏・非漢字圏(中国人学習者)・「韓国人学習者」・「その他の学習者」の要因の影響を調べた。オノマトベの難しさに対するNS ビリーフの場合、「中国人学習者」と「韓国人学習者」のビリーフが「その他の学習者」の比較では有意差が出たため、協力者を「中国人学習者・韓国人学習者」と「その他の学習者」に分けた。他の学習者要因との関係を調べるのに、相関係数分析を行った。両グループの学習者、つまり、「中国人学習者・韓国人学習者」と「その他の学習者」の場合、BS ビリーフと「自己評価によるオノマトベ能力」という要因との負の相関が確認されたが、NS ビリーフの場合、相関がなかったことから、NS・BS ビリーフが学習者要因との関連性で異なるということが分かる。したがって、仮説(3)が検証されたといえる。

審査の結果の要旨

第二言語学習において、学習者がもっている目標言語に対するビリーフ(信念、たとえば、その言語の難易度や、学習者が思っている自身の言語学習の適性など)という学習の認知面に注目した研究は1980年代後半から相当量に達している分野である。特に、BALLIという略称で知られる、質問紙を使った研究ツールがそうした研究の中心的な位置を占めており、多くの研究者に使われてきている。

本論文は、まずBALLIが調べようとしている質問項目の内容を分析の対象とし、そうした上で分類を行った点が第一の特徴である。たとえば、「ある言語[複数]は他の言語[複数]と比べて学習しやすい」「私は最終的にこの言語をとて上手に話せるようになると信じる」という項目を比べると、前者は言語学習一般について聞いているのに対し、後者は特定の言語に関する質問である。さらに、「この言語は、話したり理解したりするよりは読んだり書いたりしたほうが簡単だ」は、特定の言語の特定の要素について調べているといえる。著者はこうしたビリーフの特性にもとづいてBALLIを「全般的[General, GEN]ビリーフ」、「スコープの広い[Broad -scope, BS]ビリーフ」、そして「スコープの狭い[Narrow-scope, NS]ビリーフ」に範疇化した上で、BALLIが調査しているのはほとんどGEN/BSビリーフであることを示している。

次の大きな特徴は、日本語学習に対するビリーフをとりあげ、研究ツールの分類を行った上で数多くの研究内容と得られた結果を比較調査している点である。1、BALLIそのものを使った研究、2、BALLIに手を加えた研究、そして3、「その他」の研究を詳しく分析し、それぞれについて調べようとしている内容を特徴づける(たとえば、「その他」の研究はほとんどNSビリーフを調査している)。さらに、1、2の研究では、研究者が質問紙の項目を他言語の被調査者用に翻訳している関係で「外国語」をある特定の言語に置き換えたり、the foreign languageを「外国語」として日本語訳するなどにより項目の意味が変化し、調べているビリーフの範疇も別の範疇に移行するなどの問題点があることを指摘し、それによって、今後のビリーフ研究の方法論をより厳密なものにする必要性のあることを主張している。この点は今後のビリーフ研究のあり方を大

大きく変えるものとして高く評価される。

さらに第3章から第5章では、本研究ではじめて行ったビリーフの範疇化をどのようにして実証的な研究に応用できるかについて3つの仮説を立て、その検証のための調査研究を行っており、この点は、これからの研究への新たな方向付けを示しているといえる。

全体評価としては、第1章と第2章で新しい理論的な視点を導入し、ビリーフ研究の範疇化を行った点、また日本語学習を対象とした多くの先行研究を比較分析し、その位置付けと問題点をあきらかにした点は斬新で、高く評価される。その一方で、第3章から第5章では仮説の検証が一応得られ、今後の研究への示唆が示されている反面、第3章の被調査者の人数が少なかったり、第5章で調査されているビリーフが2つだけであったりする点は惜しまれ、さらなる研究が期待される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。